

資料③

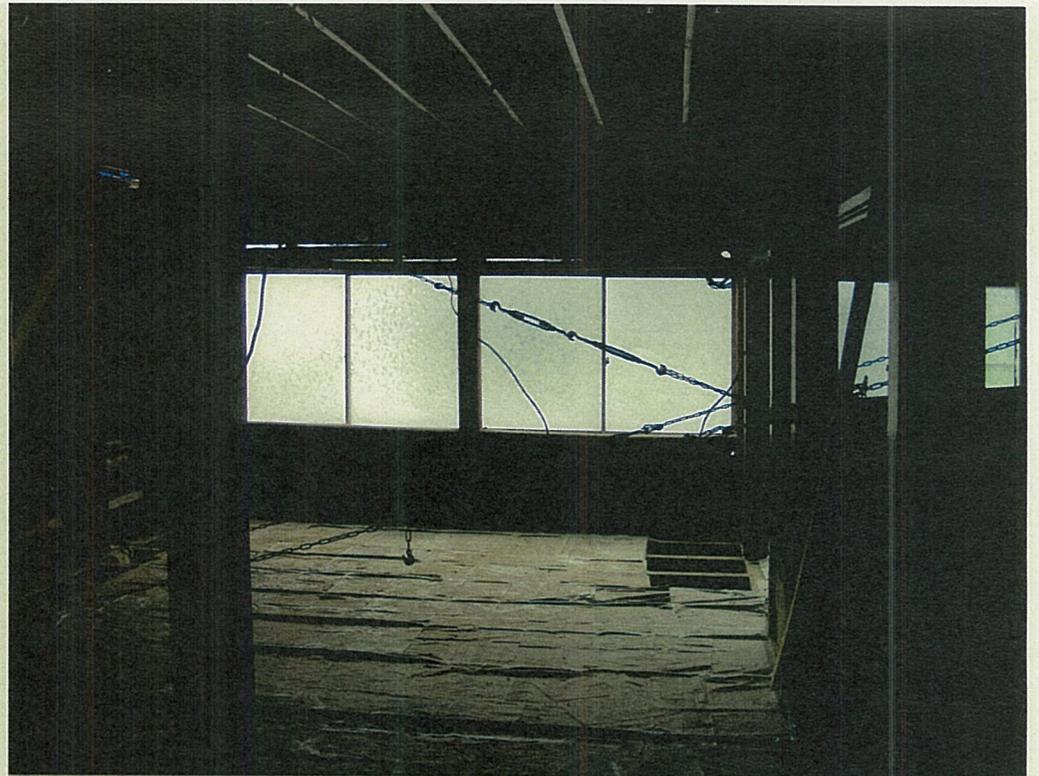
旧岡崎邸応急修理工事 現況確認写真

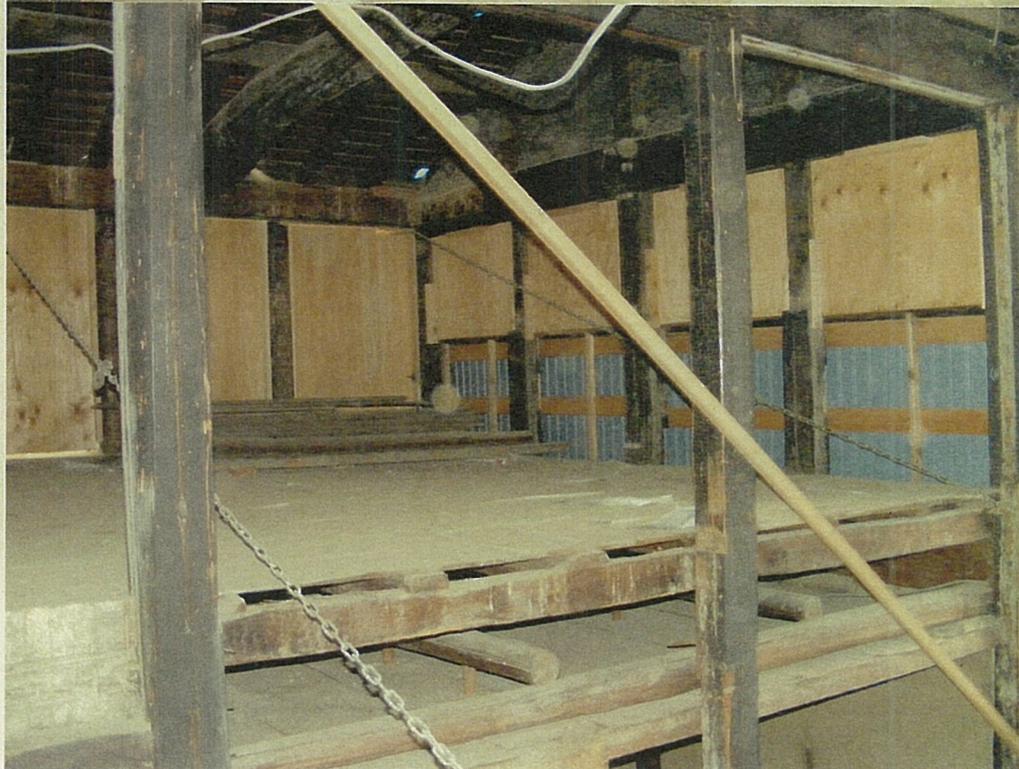
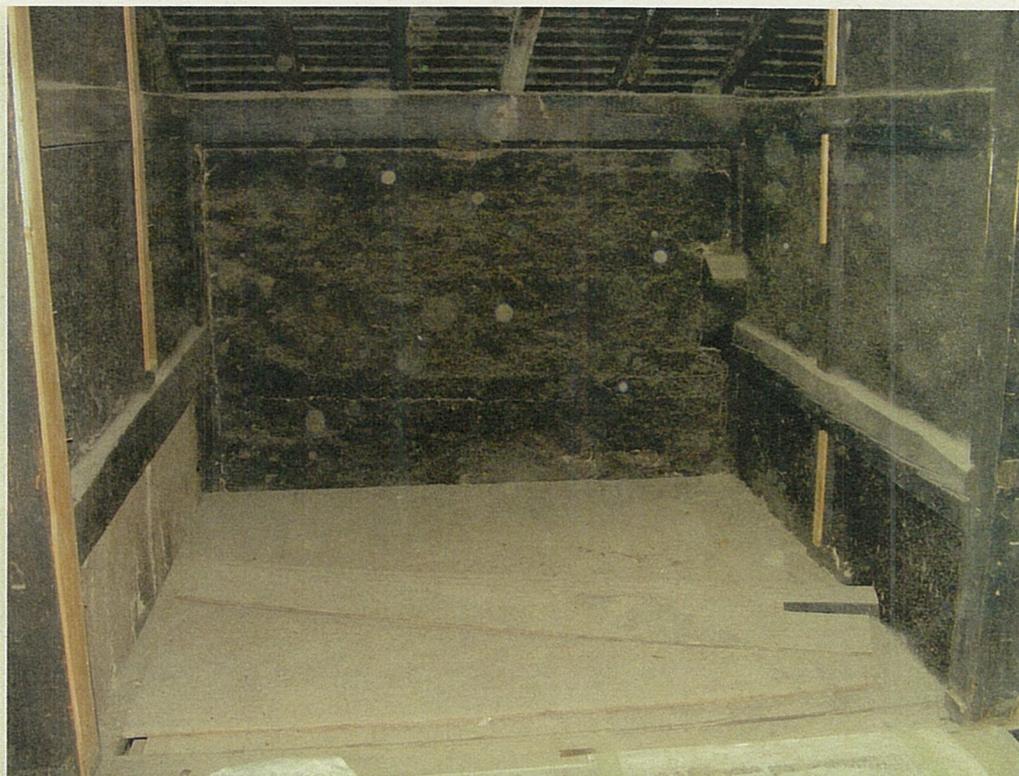
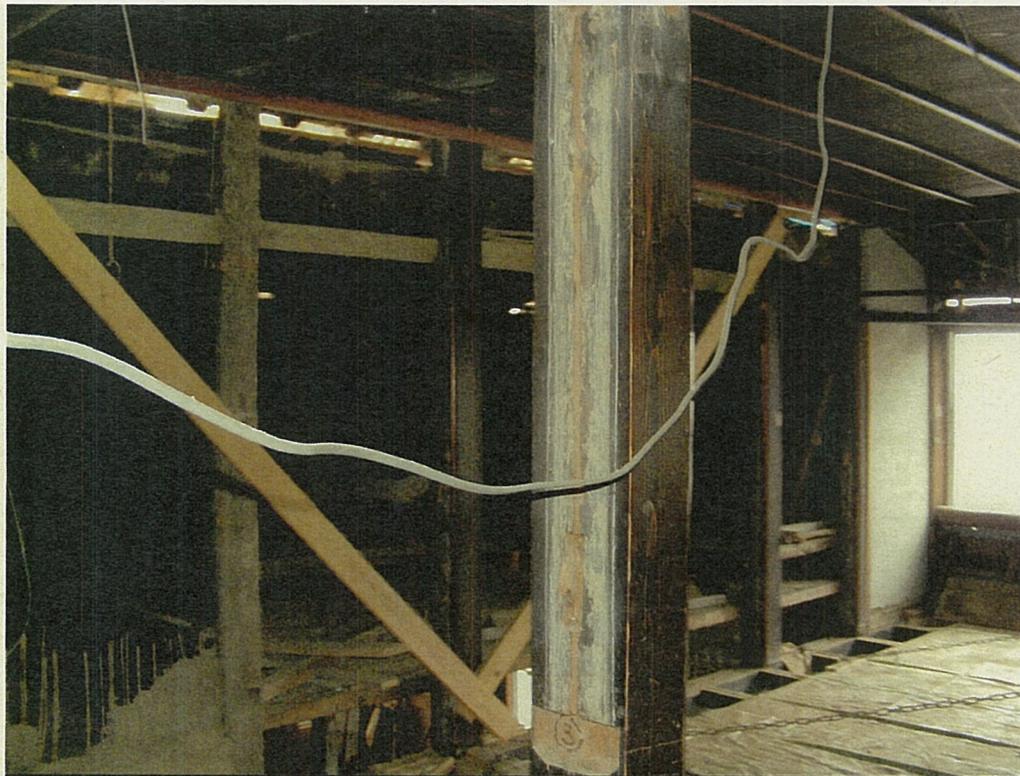
平成24年3月30日実施











平成23年度とっどりの美しい街なみづくり事業報告書
景観重要建造物緊急支援事業 鳥取市馬場町 旧岡崎邸応急修理工事 報告書

平成24年3月31日

NPO 市民文化財ネットワーク鳥取

はじめに

岡崎邸の状況

岡崎邸は、これなしには今日の鳥取県が存在しないし、鳥取市も存在しないという鳥取県並びに鳥取市の歴史の上で極めて重要な施設である上に江戸藩邸に建てられた泰姫御殿の試作建物であったため建築的に見ても数多の武家屋敷とは異なる特異な武家屋敷であり、鳥取県並びに鳥取市として保存する価値の極めて高い建物であるので、この程鳥取県並びに鳥取市が景観重要建造物候補建物として保存のための支援を下されたことは大変嬉しいことであった。

この建物は、そのような重要な建物でありながら解体されようとしていたために NPO 市民文化財ネットワーク鳥取が基金を設立し、鳥取県内外の幅広い方々からの寄付金で解体寸前に購入し、保存しようとしている建物である。

解体工事の最中に購入したため土壁の過半が撤去されており、重い屋根荷重を支えきれない状況となっており、チェーンによって辛うじて支えられており、このため一般の人々が内部入ってこれを活用することが出来ない。



修復工事を妨げる種々の問題

この建物の修理は、可能な限り速やかに行う必要があるが、様々な問題がある。

- 1) 修復には手順を踏まねば出来ない。
 - ① 屋根荷重の軽減
 - ② 部分的に土台が腐朽し、一部欠落しているのを、これを補修
 - ③ 建物の歪直し
 - ④ 壁の仮復旧・・・仮耐力壁によって建物の安定を確保
 - ⑤ チェーン撤去
 - ⑥ 屋根の葺き直し
 - ⑦ 外周開口部の修理
 - ⑧ 床の修理
 - ⑨ 内外造作の修理
 - ⑩ 壁の本復旧

- 2) チェーンを撤去して初めて人々が内部に入ることが可能となるが、そのためにはかなりの長期間を覚悟せざるを得ない。

- 3) 修理には仮設足場などが必要であるが、パイプ足場はリースとなっており、長期工事には不向きである。丸太足場なら可能と考えたが、丸太足場は京都・奈良などの文化財建物では使っているが、一般には殆ど使われな

くなっており、しかもそもそも細くて長い丸太材の供給が少なく、施工経験者も少ない。

- 4) 土壁の施工には乾燥のための養生期間が必要で、工事が難しいのは一般的だが、岡崎邸の土壁に使われている細いしっかりした丸竹は、鳥取では流通していない。
- 5) 壁仕上げは銀糸で柄が描かれた和紙であったが、このような和紙の製造には多額の費用を要する。

復元には大変な経費と工期を要することが容易に想定される。鳥取県並びに鳥取市の補助が得られることが決まってから着工までに多くの時間を要した。

着工後の天候の変化と工事方法の変更

本工事は、屋根下地の損傷の損傷がかなり進んでいると判断されたが、仮設足場のみで建物を囲い、雨天毎にシートで仮屋根覆いをする予定で工事を開始したが、着工後直ぐに降雪があり、気象予報が変化し、多量の降雪もあり得ると想定された。降雪が多過ぎれば屋根工事は不可能となり、3月末までに工事を終えることが困難となる危険性があり、これによって工費は増大し、NPO 市民文化財ネットワーク鳥取としては財源上の大問題が生まれたが、何としても屋根を軽量化し、土台直しまでは完了しないと次の工事に着手出来ない状況を打開できないので、用材の確認、施工法の検討を経て素屋根工事を行うこととなった。

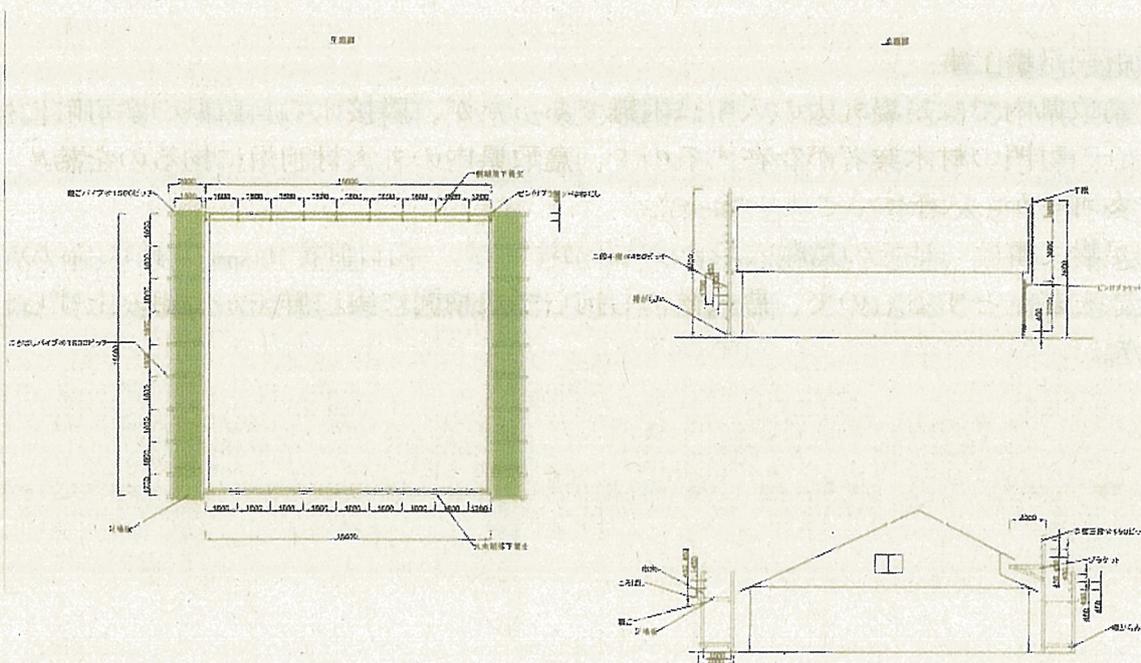
仮設足場工事

鳥取県内では足場丸太の入手は困難であったが、隣接する兵庫県の多可町には丸太専門の材木業者が存在するので、鳥取県内の丸太材利用に拘るのを諦め、多可町から入手することとなった。

足場工事は、地元の鳶職人組合の方々が行った。元口直径 100mm、長さ 6m の丸太を基本とするもので、悪天候にも拘らず短期間に実に鮮やかに組み上げられた。



丸太本足場の施工過程



足場計画図

計画変更後の工事

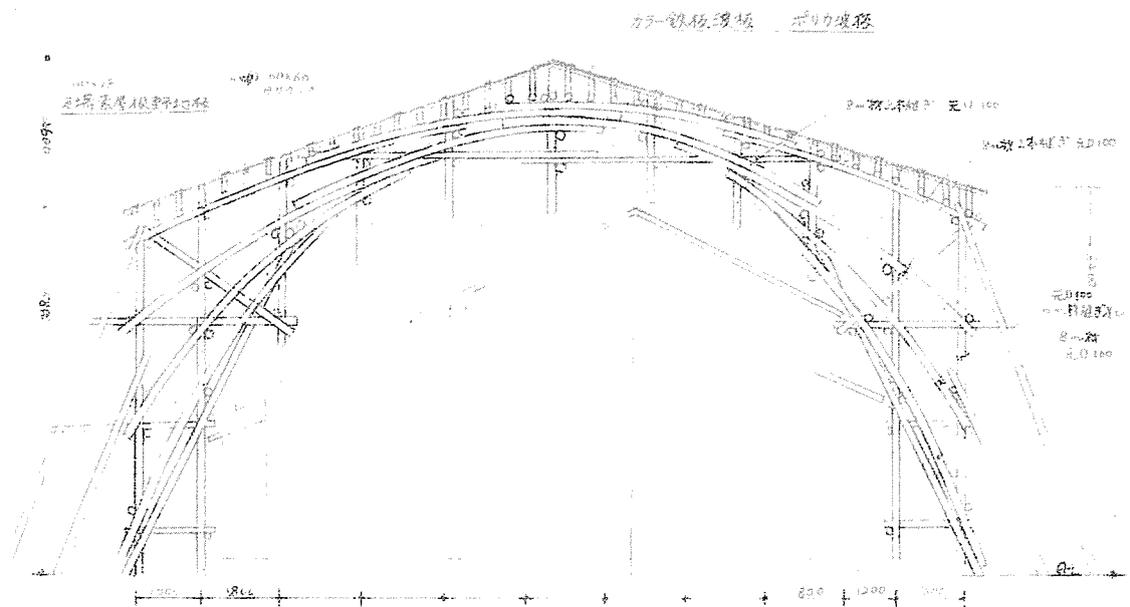
素屋根丸太組工事

素屋根の掛け方は、昭和40年代まではよく使われたが、鳥取の職人の中には熟練者は存在しなかった。京都・奈良の文化財建物の修理に使われている丸太素屋根構法を参考に施工法を検討することから始まった。

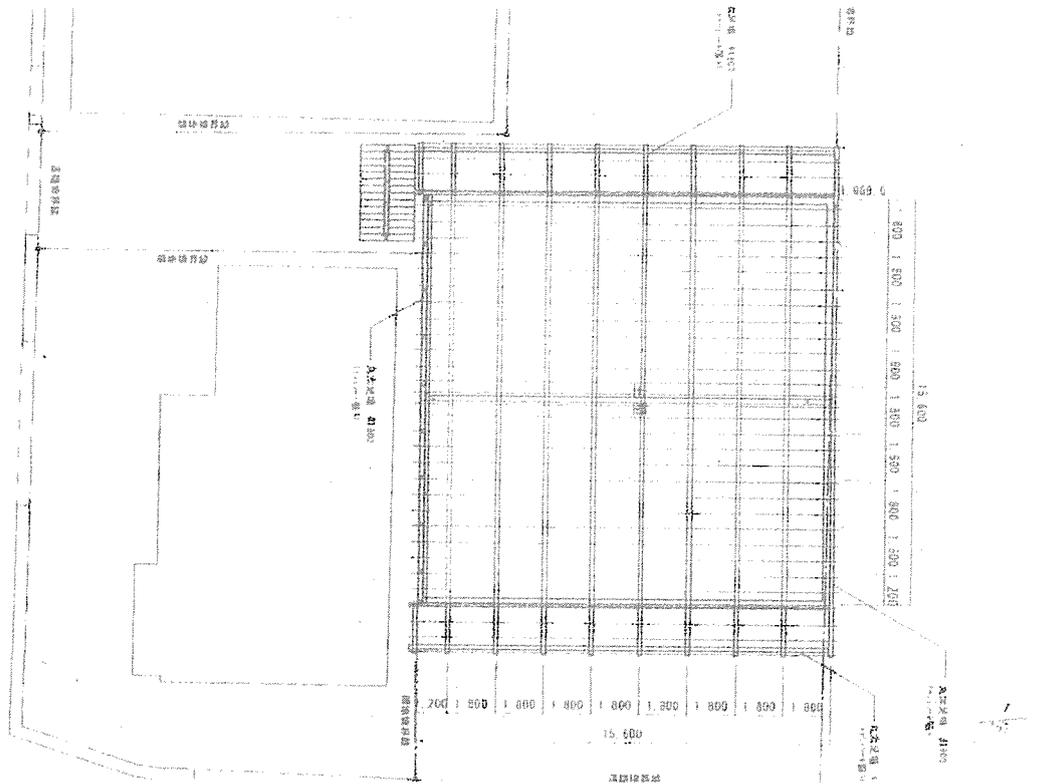
丸太は長い方が構造的には有利であるが、重量が嵩み、作業性が落ちるなどの検討の結果、元口直径100mm、長さ8mの丸太を基本として組み立てることとした。

この構法の特徴は、丸太の撓り易さを活用するので、素屋根の棟高さを抑えることが可能となる。

計画変更後は、降雪が始まっていたが、雪が降る中急ぎ施工が行われた。骨組みまでは比較的早く進んだが、その上に屋根を被せる前に降雪が多くなり、やや中断を余儀なくされた。



丸太素屋根断面図



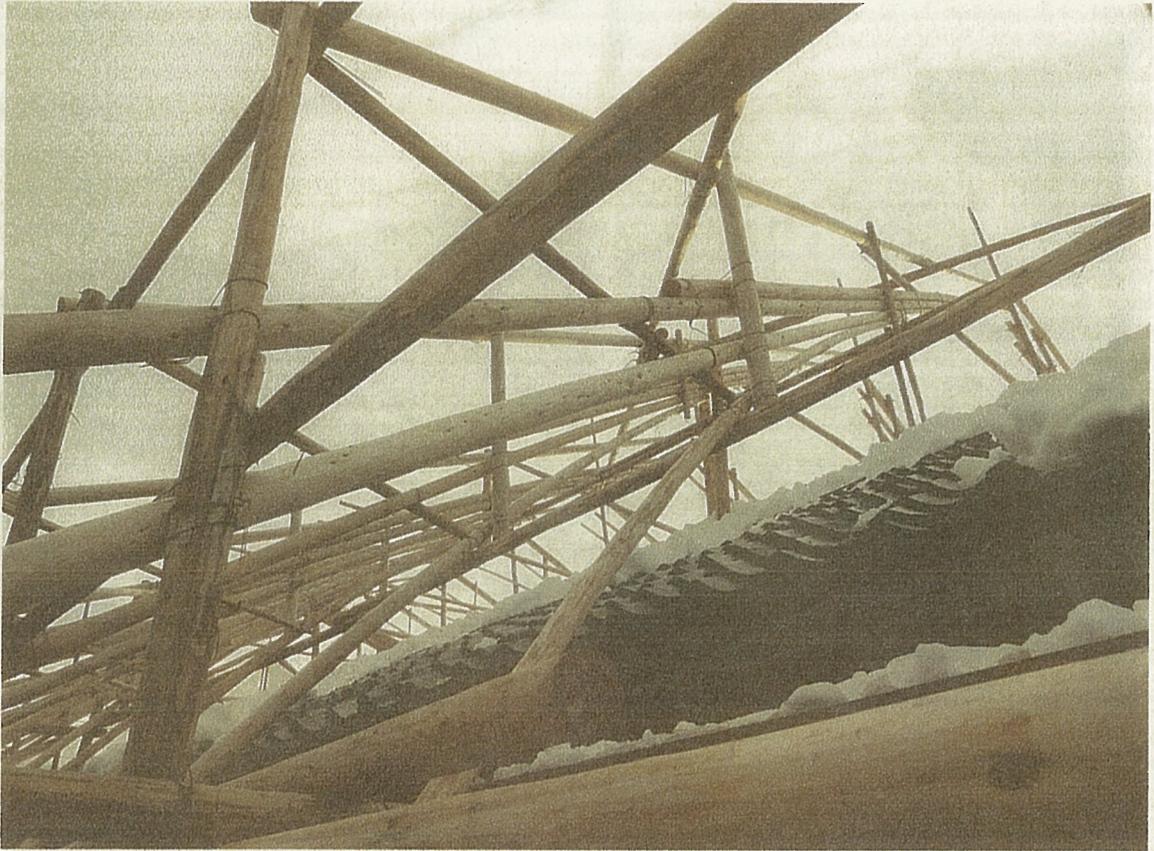
丸太素屋根伏せ図



雪の降る中に行われた素屋根骨組み工事



素屋根の丸太の撓ませ方



素屋根の丸太の組み方

素屋根波板取り付け工事

丸太の小屋組みは曲線を描いているばかりでなく、材の太さも異なるので屋根を葺くためには突き出ている丸太を切り揃え、丸太組の上に束を取り付けてレベルを調整して屋根下地をつくる。

この工事は雪の合間を見て進められたが、存外時間を要した。それでも本格的な豪雪の前に完了した。

屋根が葺き終ると翌日からは豪雪となった。



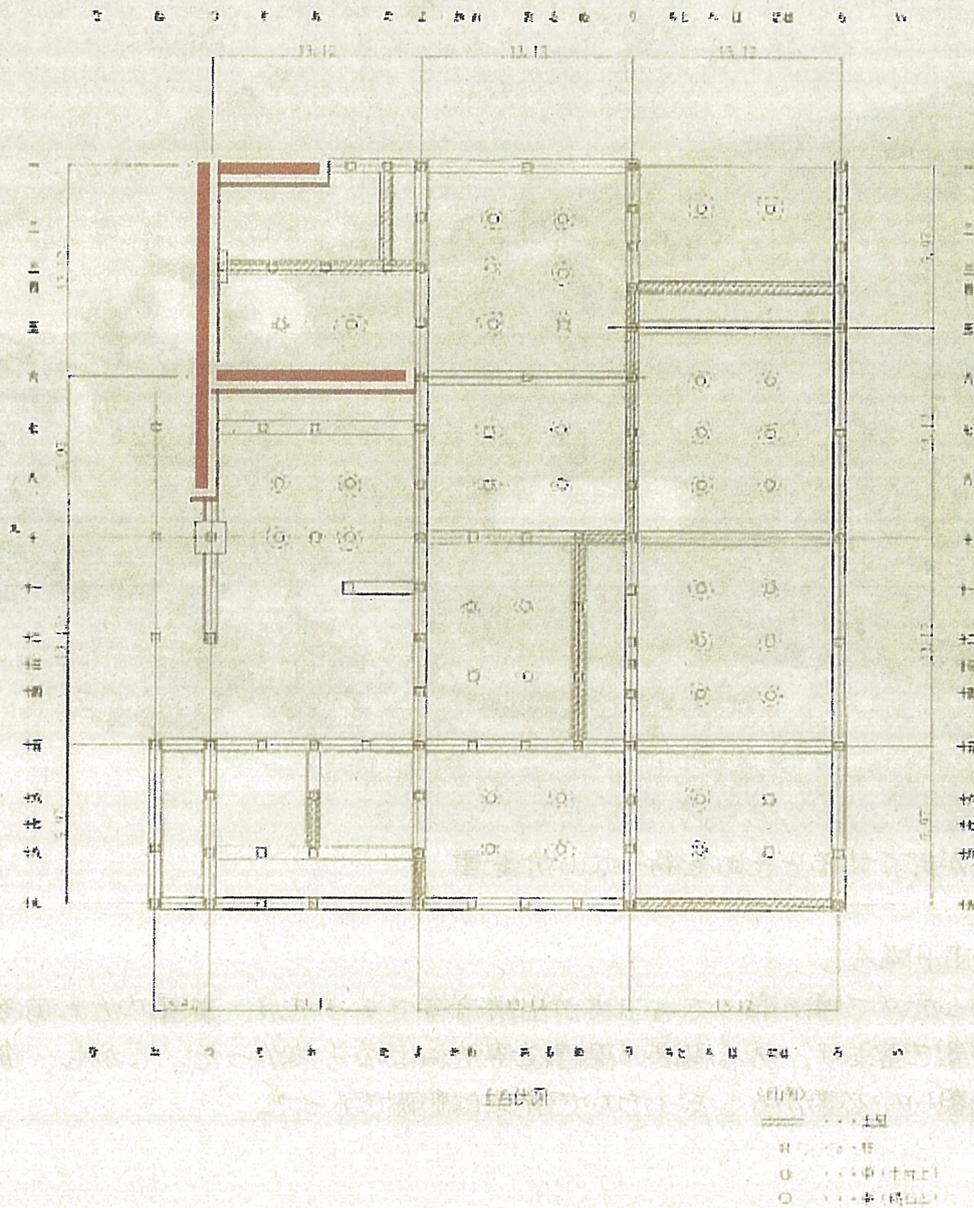
素屋根工事が完了するとそれを待っていた豪雪

瓦降ろし、瓦土降ろし

素屋根があったので雪が降っても工事が出来る筈であったが、豪雪のため瓦を降ろす庭が雪で埋まり、ある程度の融雪を待たねばならなかった。しかし、毎回、仮屋根覆いの必要がなくなったので作業は順調であった。

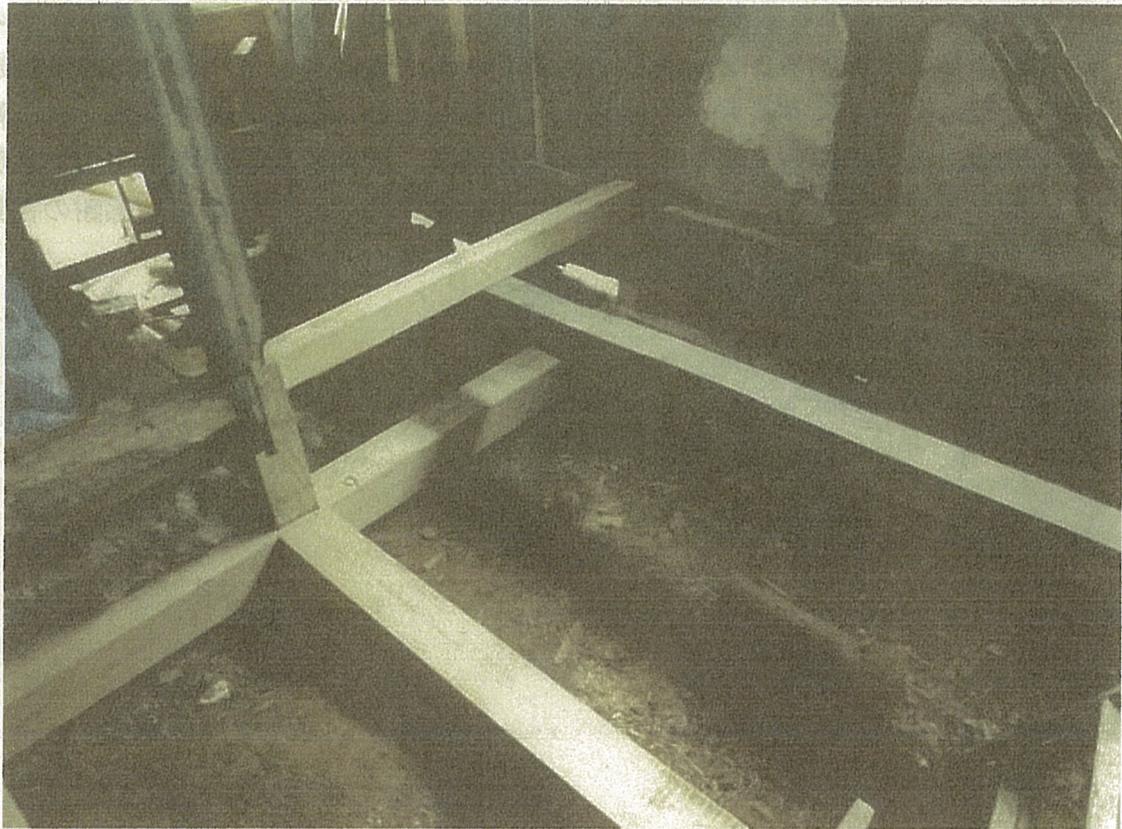
土台替え

土台替えは、かつて浴室として使われたらしい部分で、改造が行われて土台が撤去されていた部分と腐朽の著しいものを部分的に取り替えたものである。これに伴って下部の腐朽した柱の根継工事も行われた。この土台替えに当ってはジャッキアップを要したが、屋根を軽くしたお陰でかなり簡単に施工できた。



土台伏せ図 マーキングのある土台の取り替えを行った。

この土台の取り替えと共に撤去されていた足固材も補った。
 これらの土台は、下屋の先端部分であったが、これらの土台がなかったので、
 建物が浮いた状態となって母屋を引っ張っていたため柱の垂直が確保できな
 かったが、これでそのような母屋の構造を引き寄せるような力は消え、柱の垂直
 がほぼ揃った。



取り換えた土台と足固並びに柱脚部の腐朽部分の根継

今後の工事計画

以上によって今回計画した工事は完了した。

この状態ではチェーンを外すことができないので、撤去された壁を入れ直さねばならない。これを土壁で行えば大変な工期を要するので、まずは仮真壁耐力壁を入れてチェーンの撤去が可能なレベルまで建物の安定を確保する。

仮耐力壁の構造をどのようなものにするかは、今後、検討する。

ただ、予算をどうやって引き出すかが、大きな課題である。

おわりに

予想外の豪雪があったが、岡崎邸は素屋根に護られ損傷の進展を防ぐことが出来た。このような豪雪にそのまま晒せば岡崎邸の屋根の損傷はかなり進んだのではなかろうか。

積雪の多い山地や北陸ではしばしば大切な文化財、社寺を常設の鞘堂で護るが、鞘堂と素屋根は基本的には同じである。大切な建造物を保護する上で有効な方法です。

鳥取県、並びに鳥取市の暖かいご支援によってこのような保護対策を施すこと

ができたこと、心から感謝いたします。また、その他ご協力下さった多くの方々のご協力あってかとうとなったこと、殊に丸太素屋根という今日では歴史的な構法となっている技術にチャレンジして下さったとび職組合長長戸氏、大工棟梁鈴木氏、瓦の手降ろしをして下さった池原氏、丸太材をご提供下さった木原さん等の方々の実務を行って下さったために出来たことを明記して感謝の言葉に替えます。

岡崎邸保存の意義

NPO 市民文化財ネットワーク鳥取は、何故、武家屋敷岡崎邸の現地保存に固執するのか？

1) 岡崎邸の歴史的な価値

鳥取県の歴史において岡崎邸は重要な意味がある。岡崎邸があったから今日の鳥取県が存在する。島根県に吸収合併された際の鳥取県民の驚きは、主として武家の嘆きに起因するが、32万石の大藩であった鳥取県が、14万石にしか過ぎなかった島根県に吸収合併されたことは、旧藩士にとってはこの上ない屈辱であり、激しい再置活動が展開された。岡崎平内は、しかし、島根県議会の議員から更に議長となり、旧鳥取県民全体のことを考えても行政が容易に行きわたらず、生活に困る人々のためということで、国に直接働きかけ、鳥取県の再置を確実なものとした。

彼は、武士ばかりでなく多くの県民に高く評価され、鳥取県の再置が実現すると最初の県議会議長に選ばれ、鳥取に市制が敷かれると初代市長に選ばれ、更に帝国議会が開催されると初の鳥取県選出衆議院議員の一人に選ばれた。

2) 建造物の特殊性

岡崎邸は、これが武家屋敷とは考えられないという建築史の専門家も少なくない程、特異な武家屋敷である。この特異性が生まれたのはその建設経緯にあることが次第に明らかとなっている。

岡崎邸は、天保2年、藩主斉訓が徳川将軍家斉の末娘、泰姫との婚儀が決まって急遽計画され、天保6年着工、竣工を待たずに、天保7年、棟梁、森川五郎八、を泰姫御殿大工として江戸に派遣し、次いで岡崎平内自身も江戸に赴き、泰姫御殿建設の環境を整えた。鳥取から多量の木材を江戸まで搬送。江戸藩邸の工事まで地産地消が徹底された好事例。岡崎平内は、当初、300石だったが、泰姫御殿の普請が高く評価され、天保12年、500石に加増された。

この屋敷の用材は、武家屋敷としては並外れて高級であり、全ての座敷をスギ面皮仕立てとする数寄屋造りであるが、格別に美しい設えの二階座敷が隠し部屋として設けられ、窓から鳥取城を望むように造られており、これは江戸藩邸に建てられた泰姫御殿の寝所の二階座敷に符合する。

これらのことから岡崎邸は泰姫御殿建設のための試作建物であったものと考えられ、単なる武家屋敷ではなく、江戸の姫御殿のモデルハウスでもあり、江戸の藩邸がどのようなものであったかを明らかにする上でも貴重な歴史遺産である。

このためか岡崎邸の耐震対策は、20年ほど前に建てられた福田丹波邸に比して格段と改良されており、当時の木造建築耐震化技術の変遷が読み取れる貴重な歴史遺産であり、このため、昭和18年の鳥取大地震において80%強の建物が全壊し、残った武家屋敷も大きく傾いでしまったのに岡崎邸のみは略無傷であった。

この耐震技術は、深さ3尺の版築による地盤改良に始まり、部材の二重化、耐震壁効果を確保するため基礎から立ち上げられた耐震壁など、今日の耐震技術を凌ぐほどの優秀な技術であり、これを埋もれさせてしまうことは木造耐震技術の進歩を妨げることにもなる。

3) その他の特殊性

この屋敷は、地震に耐えた数少ない建物であったがために終戦後は多くの世帯が住むアパートとなった。その居住者の一人にわが国初の女性弁護士の一人、中田正子が50年余の間、事務所兼住居とし、人権擁護のために尽くした。